

佳作

祖母が教えてくれた将来の夢

神奈川県 湘南白百合学園小学校六年 黒田 明里咲

私の心には、いつも祖母がそっと微笑んでいます。祖母がガンで亡くなってしまった今でも、あの日々の温かさが、未来を目指す私の力になっています。祖母がまだ元気だったころ、私が祖母の家に行くといつも、「ありちゃん、来てくれてありがとう」と満面の笑みで迎えてくれました。優しく抱きしめてくれるその一言とそのぬくもりに、私は大きな安心感がありました。まるでその瞬間だけが、世界で一番幸せな時間のように思えたのです。

やがて祖母がガンになり、体は弱ってしまいました。ですが、それでも優しさは失われませんでした。祖母と過ごした日々、本当に幸せでした。一緒に遊び、掃除を手伝ってくれて、ご飯を作ってくれる、そんな祖母の姿に、私は心の底から救われていたのです。ある日、私の庭のウッドデッキが壊れたとき、祖母は修理代を出してくれました。そして、

祖母の病室での最後の笑顔、抱きしめてくれたそのぬくもり、ウッドデッキにこめられた思い出、そして私をなぐさめてくれた看護師さん。その全てが、私が医師を目指す原点になりました。医学の知識で病を治すだけでなく、かん者さんの心にもそっと寄りそえるそんな温かい医師になりたいと強く想っています。

医師になるためには、たくさん勉強と努力が必要です。だから、祖母が私にくれた思い出、看護師さんの言葉を思い出して勉強をしたいと思います。将来、私が医師になったときには、あの看護師さんと祖母のように人の心に寄りそい、笑顔と安心を届けられるようになることが、祖母がくれた将来の夢です。

「このウッドデッキを見たら私を思い出してね。」と静かに言ってくれたのです。その言葉は今でも私の胸に深く刻まれています。ウッドデッキを見るたびに、祖母がそっと笑っているように思えて、心が温かくなります。

しかし、祖母の命は少しずつ終わりへと近づいていました。私はその最期を受け入れることが怖くてたまりませんでした。病室にいるのがつらくて、「大好きな祖母が、もうすぐこの世からいなくなるんだ」と思うと、耐えられずに祖母の病室を飛び出し、一人でうずくまって泣いてしまいました。

その時、看護師さんが静かに私のそばに来てくれました。そっと背中をなでながら、「つらかったね。でもおばあちゃんはいつもありさ

さんの話をしてくれていたよ。」と優しく言ってくださりました。祖母の病室での話を詳しく教えてくださいました。その話を聞いて、私は泣き続けることしかできなかったけれど、その優しさに救われました。

その瞬間、私もあの看護師さんになりたいと思いました。同じように大切な人を亡くして悲しんでいる人に寄りそい、言葉で支えられる医師になりたいと心の底から思いました。